

トピックス

野尻湖の水草の現状 ——水草帯復元への兆し?!——

長野県北部の野尻湖では1970年代に水草が増えすぎて船の航行などの障害となりました。そこで水草を除去するため1978年に草食性のソウギョ 5000匹を放流したところ、水草は3年間で食べ尽くされ、以後、水草が全く無い状態が続いています。1988年には藻類ウログレナを主体とした淡水赤潮が発生し大きな問題となりましたが、その原因の一つが水草の欠如による湖沼生態系の単純化だと考えられています。

これを契機に水草帯（水草が群生している場所）の水質浄化機能などが地域で知られるようになりました。そこで地域住民と当所など研究機関により野尻湖水草復元研究会が設立され、水草帯の復元を目指して活動してきました。ソウギョが侵入できない水草復元実験区を野尻湖内に設置し、検討をすすめた結果、野尻湖では特別な土木工事は行わなくてもソウギョを除去するだけで水草帯を復元できることが示されました。

ソウギョの増殖には安定した流水が必要で、国内では利根川のみで増殖が可能であり、野尻湖では増殖できません。現在、活発な活動を続けている大型のソウギョは30年以上前に放流された個体です。これまで釣り上げによる捕獲が行われてきましたが捕獲数は年々減少し、近年の年間捕獲数は1～2匹程度です。そこで2009年夏期から新たな捕獲法の検討を行うこととし、野尻湖での予備実験でソウギョの捕獲が確認された小型の定置網を採用することにしました。

ところが、これらの準備を進めていた2008年秋



図1 捕獲されたソウギョ（体長119cm 体重16kg）の剥製 環境学習資料として野尻湖ナウマンゾウ博物館で展示

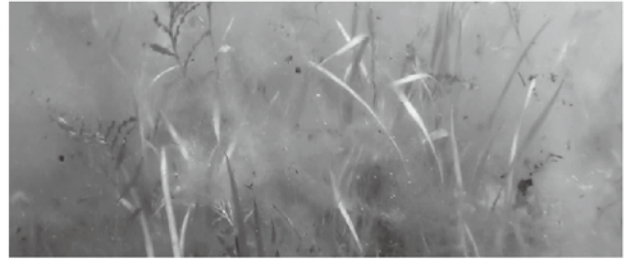


図2 野尻湖沿岸のアオミドロ群落内に自生するセキシヨウモとエゾヒルムシロ

からの約1年間で合計6匹のソウギョが釣りなどにより捕獲されました。中でも2009年春に捕獲された2匹は体重16～17kgのこれまで見たこともないような大きなソウギョでした。これらの捕獲を経験してその後のソウギョ捕獲法検討への期待がふくらみましたが、実はこれを境目に野尻湖は変わり始めました。

この後開始した定置網利用の捕獲法の検討ではソウギョの捕獲はなく、定置網周辺に設置した餌の水草が食べられた様子はありません。同様に釣りでも全く捕獲されず、目撃情報は1件のみでした。一方、野尻湖でこれまでソウギョが餌として利用してきたアオミドロは大きな群落をつくるようになり、水面下には僅かながら水草の群落も見られるようになりました。この状態は年ごとの変動が見られるものの、2年間続いています。

以上の経過を気象条件なども考慮して検討した結果、『野尻湖ではソウギョの個体数が減少したため、アオミドロや水草の増殖能力がソウギョの食べる力(食圧)を上回り、水草の残存・復元が始まった』と推定されました。なお、現在も少数ながらソウギョが残っていることから、水草は増減を繰り返しながら、ゆっくり増えていくと考えられます。

水草帯は湖沼の生物種多様性を維持するためにも重要な場所です。きれいな水と多様な生き物が棲む野尻湖本来の姿への回復を願い、今後も水草復元過程モニタリング調査を継続します。

(樋口澄男 kanken-mizu@pref.nagano.lg.jp)